

研究ノート

第一次世界大戦下 ドイツ人の反戦行動と日本人 —安達峰一郎の講演を端緒にして—

松本邦彦

1) 序

戦前に活躍した山形出身の外交官、国際法学者の安達峰一郎^{あだちみねいちろう}（1869-1934）は、駐仏大使時代の1930年（昭和5年）春に常設国際司法裁判所裁判官への立候補準備のため一時帰国した。約三ヶ月間の滞在のうちに駐仏大使を免じられ、欧州に戻ってから同年9月におこなわれた常設国際司法裁判所判事選挙では最多得票で当選、さらに判事たちの互選によって1931年1月から所長となった。その帰国中に安達は当時の国際連盟、また常設国際司法裁判所についての講演を複数回おこなっている。その講演についてこれまで特に注目されていた点は、判事選挙において安達に不利に働くと思われた日本の義務的管轄権（応訴義務）受け入れ問題だったが⁽¹⁾、本稿ではその中で彼がおこなった“人違い”に着目する。彼は講演のなかで、彼がよく知る人物、また日本でも一部の国際法研究者には周知の人物を紹介し、賞揚したのだが、そのプロフィールの一部は本人のものではなかったのである。その“人違い”が意識的なものか無意識の勘違いなのか、また、聴衆がどう受けとめたのかを探る前に、本稿では、安達で紹介したプロフィールを聴いた聴衆は、誰を脳裏に描い

(1) たとえば、柳原正治^{やなぎはらまさはる}、篠原初枝^{しのはらはつえ}編『安達峰一郎：日本の外交官から世界の裁判官へ』（東京大学出版会、2017年）所収の柳原正治「第一章 安達峰一郎の生涯」018-020頁、明石欽司^{あかしきんじ}「第三章 安達峰一郎と日本の国際法学」062頁。

たのか、その可能性を調べることにした。

なお、本稿では引用、参照にあたって下記のようにしている。

- ・安達峰一郎著、柳原正治編^{やなはらまさきはる}『世界万国の平和を期して：安達峰一郎著作選』（東京大学出版会、2019年）を書名を略して『著作選』としている。
- ・朝日新聞の記事は「朝日新聞記事クロスサーチ」を、読売新聞の記事は「ヨミダス歴史館」を利用している。
- ・出典としてURLを<https://dl.ndl.go.jp/pid/...>と表記したものはいずれも国立国会図書館デジタルコレクション（<https://dl.ndl.go.jp/>）による。
- ・引用にあたって旧字体を新字体に変更した箇所（例：国際聯盟→国際連盟）がある。また難読漢字には振り仮名を付けた。

2) 安達峰一郎の講演における“人違い”について

安達が一時帰国をした1930年当時の日本は2月の衆議院総選挙によって浜口雄幸^{はまぐち おさち}（生年1870-没年1931）が首相を、外相^{しではら きじゆうろう}を幣原喜重郎（1872-1951）がとめる内閣の与党、民政党が圧勝して絶対多数を占めたものの、大恐慌の影響による不況下にあり、2月には日本共産党員の一斉逮捕、また4月にはロンドン海軍軍縮条約への調印とその後の批准をめぐる「統帥権干犯問題」で揺れていた。そのさなか、安達は残されている記録で確認できるところ、以下の六回の講演、講義をおこなっている⁽²⁾。

【講演・講義その一】1930年4月18日（金曜日）夕、丸の内の東京

(2) 「これらの講演は内容的に重なる箇所が一部あるが、いくつものテーマについて触れており、準備にどれだけの時間をかけたのかが想像される。』『著作選』解説196頁

銀行倶楽部⁽³⁾が安達を招待して第249回晩餐会を開催し、安達は「世界大戦後の外交と二箇の重要事件」と題して講演。聴衆は会員158名⁽⁴⁾。

【講演・講義その二】1930年4月24日（木曜日）午後、宮中の御学問所において、昭和天皇（1901-1989）を相手に「最近九年間ノ歐洲及其ノ対亜対米關係」と題する講話をおこなった。陪聴したのは内大臣の牧野伸顯^{まきののぶあき}（1861-1949）のほか宮内次官、侍従武官長、内大臣秘書官長、侍従長、同次長⁽⁵⁾。

- (3) 東京所在の銀行業者による業界団体「東京銀行集会所」（1880年＝明治13年創立）が、銀行家や政治家、財界人が集うサロンとして1899年（明治32年）に銀行倶楽部を開設した。東京銀行集会所の初代会長は渋沢栄一子爵^{しぶさわゑいいち}（1840-1931）。東京銀行集会所は敗戦後に東京銀行協会となったのち、2011年に一般社団法人全国銀行協会に集約された。銀行倶楽部は1942年（昭和17年）に閉鎖、敗戦後の1957年に再開したが2016年（平成28年）に閉店。参照：一般社団法人全国銀行協会ウェブサイト＞全銀協の歴史 <https://www.zenginkyo.or.jp/abstract/outline/history/>、東京會館ブログ＞2006年12月7日 銀行倶楽部 <https://kaikanad.exblog.jp/5097473/>。公益財団法人渋沢栄一記念財団ウェブサイト＞渋沢栄一関連会社・団体名変遷図＞銀行団体A〔金融〕（2019年3月29日作成／2020年7月31日改訂） <https://kaikanad.exblog.jp/5097473/>
- (4) 『銀行通信録』（東京銀行集会所）89巻532号（1930年5月20日）掲載の「録事」＞「東京銀行倶楽部晩餐会」595頁、<https://dl.ndl.go.jp/pid/1587151/1/51>。講演録は同号556-563頁掲載。『著作選』では資料〔57〕として掲載。なお『著作選』解説は本講演を1930年5月20日の開催としているが（196頁）、5月20日は掲載号の日付である。
- (5) 宮内庁『昭和天皇実録 第五』（東京書籍、2016年）579-580頁。この御進講は『實業之世界』1930年6月号（27巻6号）001頁掲載の「皇室及皇族の御近状」にて「聖上欧州事情を聴召さる」として報じられ（<https://dl.ndl.go.jp/pid/10293136/1/14>）、そこには「陛下にはいと御熱心に聴召された」とある（文中の振り仮名は省略）。また『昭和天皇実録 第五』によると、帰国後の安達は、まず4月18日（金曜日）に、欧米から帰国した他の面々と共に天皇に拝謁しており、その中には、のちに細菌戦部隊を指揮することになる陸軍一等軍医の石井四郎^{いしいしろう}（1892-1959）もいた（575-576頁）。そして御進講の翌週の月曜日、4月28日にも昭和天皇は安達夫妻を招待して皇后と共に晩餐をしている（581頁）。この処遇の背景には、昭和天皇が皇太子時代の1921年（大正10年）に欧

【講演・講義その三】1930年5月8日(木曜日)、日本経済連盟会⁽⁶⁾と日本工業倶楽部⁽⁷⁾の連合で安達を招待しての歓迎午餐会を開催。安達の講演の題目は「欧州の近状並に世界当面の重要諸問題」。聴衆は225人⁽⁸⁾。

【講演・講義その四】1930年5月9日(金曜日)、国際連盟協会⁽⁹⁾東

州旅行をした際に安達が初代の駐ベルギー特命全権大使として接遇していたことや、安達の妻、鏡子(1870-1962)が大正天皇の皇太子時代の東宮職御用掛(1893年=明治26年~1894年、1906年~1912年)や大正天皇の皇后職御用掛(1912年=大正元年~1917年)を勤めていたことがあるのだろう。鏡子の御用掛について参照、『国際法にもとづく平和と正義を求めた安達峰一郎：書簡を中心にして』(安達峰一郎博士顕彰会、2011年) > 「第六章 峰一郎を支えた鏡子夫人の喜びと悲しみ」229-232頁。

- (6) 日本経済連盟会は、日本銀行総裁であった井上準之助(1869-1932)が創立発起人となって1922年(大正11年)に設立された中央経済団体。すでに中央経済団体としては日本工業倶楽部があったが、工業や京浜地域にかよったメンバー構成だったため、連盟会には銀行業者や関西財界の経営者などを加えた。初代会長は三井財閥の統率者、団琢磨男爵(1858-1932)。敗戦後に解散し、経済団体連合会に再組織された。現在は一般社団法人日本経済団体連合会となっている。参照：アジ歴グロッサリー(国立公文書館 アジア歴史資料センター) > 日本経済連盟会 <https://www.jacar.go.jp/glossary/term1/0090-0010-0040-0070-0010.html>。
- (7) 日本工業倶楽部は1917年(大正6年)に工業家による業界団体として設立。初代理事長は日本経済連盟会と同じく団琢磨。現在は一般社団法人日本工業倶楽部となっている。参照、同倶楽部のウェブサイト > 「日本工業倶楽部について」 <http://www.kogyoclub.or.jp/about.html>。
- (8) 『社団法人日本工業倶楽部会報』16号(1931年5月25日)027-029頁(講演の速記録は029-047頁掲載) <https://dl.ndl.go.jp/pid/1218396/1/22>。『著作選』では資料[53]として掲載。午餐会の開会挨拶をしたのは団琢磨。
- (9) 国際連盟協会は1920年4月に外交官や国際法学者らにより設立された半官半民の団体。初代会長は渋沢栄一子爵(1840-1931)、初代総裁は徳川家達公爵(1863-1940)。欧米各国では第一次世界大戦前より存在していた民間の平和団体、国際親善団体が米大統領ウィルソンの「国際連盟」提案後に国際連盟協会となり、さらには1919年1月のベルサイユ会議開始後まもなく第一回目の世界連合会議を開いていた。日本の協会は、その連合会議に参加するための設立でもあった。ただ、設立の発端自体は、日中間に存在する「山東問題」

京帝大支部⁽¹⁰⁾で講演。論題は「国際連盟の発達は健全なりや」⁽¹¹⁾。
聴衆数は表記がないので不明。

【講演・講義その五】1930年5月16日（金曜日）夕、丸の内生命保険協会で開催の国際連盟協会第十回通常総会⁽¹²⁾にて、議事終了後に講演⁽¹³⁾。その後に晩餐会が開催され、幣原外相のテーブル

が中国の協会によって連合総会に提議されることを阻止しようというもので（池井優「日本国際連盟協会：その成立と変質」『法学研究』68巻2号（1995年）001-002頁、https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/download.php/AN00224504-19950228-0023.pdf?file_id=114467、）、その「山東問題」提議の事前情報をつかんで日本本国に伝えたのは、当時駐ベルギー公使の安達であった（岩本聖光「日本国際連盟協会：30年代における国際協調主義の展開」『立命館大学人文科学研究紀要』85号（2005年）123-124頁、<http://doi.org/10.34382/00013763>）。なお機関誌は『国際連盟』として始まったが、1922年10月号（2巻10号）からは『国際知識』に、1937年4月号からは『国際知識及評論』に、1942年1月号から『外交評論』に改名した。

- (10) 国際連盟協会の学生会員は大学別に組織され、48の大学に支部が設置されて討論会、講演会をおこなっていた。学生支部を最初に設立したのは早稲田大学（1924年2月）で、東京帝大（同年5月）、慶應義塾（同年6月）とつづいた。東京帝大学生支部発会時の会員数は「八十余人」で、初代支部長は協会理事でもある山田三良教授（1869-1965）だった（吉村正道「国際連盟協会東京帝大学生支部の創立」『国際知識』4巻7号（1924年7月号）168-171頁、<https://dl.ndl.go.jp/pid/10985761/1/88>。参照：前掲、池井優「日本国際連盟協会」031頁。
- (11) 講演録は「講演の一節」として『国際知識』10巻6号（1930年6月）007-017頁に掲載（<https://dl.ndl.go.jp/pid/10985833/1/5>）。『著作選』では資料 [54] として掲載。なお、この講演会での講師は安達と協会理事の新渡戸稲造（1862-1933）の二人であった（『社団法人国際連盟協会会務報告 昭和5年度』（国際連盟協会）>「十五、学生支部」>「二、関東連合会」>「東京帝大」061頁、<https://dl.ndl.go.jp/pid/1711647/1/33>）。
- (12) 総会では1929年度の会務報告と会計報告、1930年度の予算案が審議されると共に、ロンドン海軍軍縮条約締結をうけてさらなる軍縮を求める宣言や、常設国際司法裁判所の応訴義務受諾を日本政府に求める決議をあげている。前掲、『国際連盟協会会務報告 昭和5年度』>「二、第十回通常総会」002-003頁、<https://dl.ndl.go.jp/pid/1711647/1/4>。
- (13) 『著作選』では資料 [55] に「安達大使の演説」として掲載。

スピーチを経て散会。参加者数について協会機関誌は「百五十名未曾有の多数の参加があった」と記している¹⁴⁾。

【講演・講義その六】1930年5月17日（土曜日）、貴族院予算委員室で開催の貴族院定例午餐会にて講演。安達の題目は「国際連盟の現状と常設国際裁判所判事の来秋総選挙」¹⁵⁾。当時の貴族院議長は徳川家達公爵（1863-1940）で徳川は国際連盟協会総裁でもあった。聴衆人数の記載はないが、当時の貴族院議員の数は398人だった¹⁶⁾。

いずれの聴衆も、昭和天皇は言うに及ばず、政官財界の実力者たちとエリート予備軍である。昭和天皇への講義内容の詳細はまだ不明だが、その他の五つの講演では、上記のように国際連盟やドイツの賠償問題のことなどととも、その年の9月におこなわれる裁判所判事の選挙について触れている。そこで具体的に各国からの判事の推薦状況について言及していたのが下記の銀行倶楽部での【講演・講義その一】、日本工業倶楽部での【講演・講義その三】、貴族院での講演【講演・講義その六】の三つの講演である。そのいずれでも、ドイツから推薦される候補者について次のように言及していた。

【講演・講義その一】（東京銀行倶楽部）：「独逸の「グループ」が持

14) 『国際知識』10巻6号（1930年6月）掲載の「第十回本協会通常総会」125-126頁、<https://dl.ndl.go.jp/pid/10985833/1/64>。なお前掲の『会務報告』では「会員百六十名出席す」としている（002頁）。

15) 『貴族院定例午餐會講演集 第41』（貴族院、1930年7月印刷）、<https://dl.ndl.go.jp/pid/1352264>。『著作選』では資料[56]として掲載。講演速記録の冒頭に、「本講演速記は講演者安達大使歐洲に出発の為同大使の校閲を経る暇なかりしに付誤謬なきを保し難し」との注記あり。

16) 第58回帝国議会での人数で、第58回帝国議会は5月14日（水曜日）に閉会していた。『貴族院要覧（乙）昭和五年十二月増訂』（貴族院事務局、1930年12月）>「第二編 附録」>「議員所属員数表」>「一、議員出身別」、<https://dl.ndl.go.jp/pid/1464127/1/288>。

出した候補などは、或る意味に於ては候補の「モデル」と称して宜からうと思ひます。餘り世の中に「ペーパー、ヒーロー」（新聞紙上の英雄）的に知られて居りませぬから、貴方がたの中には名前も御存知ない方がおありと思ひますが、我々仲間には極りなき尊敬を受け居るワルテル・シモン君である。彼は元来学究であります⁽¹⁷⁾。〔※文中の人名に引かれた傍線は省略した。〕

【講演・講義その三】（日本工業倶楽部）：「今既に候補に立って居る人は、私の知って居る限りでも四十人あります。其中で私共の考へで当選疑なしと思ひますのは、ドイツの候補者、シモンと申す私の友人であります。学界の友人⁽¹⁸⁾。』

【講演・講義その六】（貴族院）：「ちょっと極内輪の会合でございますから申し上げますが、独逸は國際連盟加入後に頓に其國際的位置が向上いたしまして、又其向上に対する努力は益々盛んになって居ります。〔日本に長く駐節していた駐日大使ゾルフが〕「今より四週間前に委任統治委員会の一員たることを承諾して其任に當って居ります。是も独逸国が如何に連盟の事業に重大なる關係を以て又如何に其多年の希望を実現しやうと云ふことに努力して居るかと云ふ証拠であります。又同じ思想の順序として此九月二十日の総選挙に、最も私共の尊敬崇拜しなければならぬシモン博士を候補に立て、其承諾を得て居ると云ふことを此処に居る独逸の代理大使、並に彼地を出発する時に私の同僚独逸大使も言うて居りました。ドクトル・シモンと申しましたも遠い日本に於ては知られてない、詰り新聞上の英雄ではございませぬ⁽¹⁹⁾。』

(17) 『著作選』資料 [57] 288頁。

(18) 『著作選』資料 [53] 237頁。

(19) 『著作選』資料 [56] 271頁。

そして上記の講演では、その「シモン」について概略次のようなプロフィールを紹介していた。

- ・大戦前にはドイツで国際商法を講義していた。
- ・大戦中にドイツ軍が中立国ベルギーに侵攻したことをもってドイツ皇帝を非難した。
- ・その皇帝に対する抗議行動のため投獄されて困窮に陥った。
- ・戦後には南米の諸国から招致されて講演をおこなった。
- ・戦後、ワイマール憲法の起草をした。
- ・ワイマール共和国では外相、そして仮大統領となってヒンデンブルグ大統領の誕生を準備した後、みずからは大審院長となった。

常設国際司法裁判所判事の候補者として当時有力視されていたドイツ人の「シモン」と言えばワルター・ジモンズ (Walter Simons / 1861-1937) であり²⁰⁾、『著作選』解説もまた安達が言う「シモン」をワルター・ジモンズとしている²¹⁾。たしかにジモンズ (日本ではシモン、サイモン、

20) 国際連盟事務局東京支局主任の青木節一^{あおき せついち}が1930年8月8日付けで書いた記事でも次のようにジモンズを有力視していた。「今日まで連盟に通告された候補者はデンマークとオランダが推薦した八名丈けが判明してゐる。その中にはドイツ高等法院長ワルター・シモンズ博士、米国前國務卿フランク・ビー・ケロツグ氏、チャーレス・ハイド博士 (米国コロンビア大学教授) 等がある。」(青木節一「国際司法裁判所問題一束」『法律時報』2巻9号 (1930年9月) 055頁、<https://dl.ndl.go.jp/pid/10988169/1/29>)。なお日本からの推薦^{かく}について青木は、「日本は如何なる人を推薦したか不明であるが、兎に角安達峯一郎〔ママ〕博士はその一人たることは確かである。然し今日まで同博士を推薦する意向が外国に大分あるやうであるからその当選は疑ひないところであらう。」と書いている (055頁)。

21) 『著作選』[53] 237頁での注10。安達の、裁判官候補としてドイツからは「シモン博士」が立つという予測は外れ、実際に最終候補となり、裁判官となったのはワルター・シュッキング (Walther Adrian Schucking / 1875-1935) だった。参照：後藤春美「第九章 安達峰一郎と国際連盟の判事選挙：国際社会にお

ジモンスなどの表記がある) は日本でもドイツ敗戦後の外務大臣として知られるようになっていたが²²⁾、そのジモンスには安達が言う「シモン」のプロフィールすべてが当てはまるわけではない。特に異なるのは次の二点である。

- ・ワイマール憲法の起草者として知られているのはユダヤ系ドイツ人のフーゴー・プロイス (Hugo Preuß / 1860-1925) ²³⁾。
- ・ワルター・ジモンスには戦時下に皇帝を非難して投獄された経験はない。

当時の日本の学界でも国際私法学者のジモンスが知られていたのは確かで、敗戦後の著作ではあるが折茂豊『国際私法の統一性』(有斐閣、1995年)にて、「たとえば、ジモンスが、ドイツ国際私法に関するその著名な講義のなかで、次のようにいっている。」として1926年に「ハー

ける地位」(前掲『安達峰一郎：日本の外交官から世界の裁判官へ』所収) 201頁。

22) たとえば朝日新聞1920年6月29日(東京/朝刊)の記事「独逸事情/独逸新内閣員」では、「外務のシモンスは民主党员にしてウェルサイユ講和独逸委員ランツアウ氏の通牒の多くは氏の起草せるものなり」として紹介され、その後も外相としての活躍が報じられている。

23) 名倉聞一 (1884-1938) は朝日新聞のベルリン特派員時代の紀行文をまとめた1927年刊行の本の中の「独逸憲法の起草者」という一節にて、プロイスについて次のように触れている。「独逸共和国の新憲法を起草したプロイス博士は猶太人である、起草当時は内務大臣であったのだが、独逸の内務大臣が猶太人であったことは誠に珍らしい、実に破天荒なことだ。」「プロイス博士は元気で剛腹で敏俊な人である、自分も政界の闘士たらんことを欲し、実際また偉大なる政治上の闘士であった。」「大戦中軍閥プロイセンの圧迫をもものもせず独逸憲法改正案を発表し、これを印刷して友人間に配布した。」「革命から丁度一週間目に内務大臣を引き受けなかつたかと云ふ相談があった、プロイス博士は一寸躊躇してゐたが、やがて「ヤア」と答へた。〔改行〕今迄プロイス博士の仕事は多く法律の理論家としてのみの活動であったが、今や實際独逸共和国の憲法を起草し、独逸国民未来の生活形式の基礎を作る任務を負ふたのである」(名倉聞一『海外点心記』(大阪屋号書店、1927年3月) 201-204頁、<https://dl.ndl.go.jp/pid/1187903/1/107>)

「国際法アカデミー講義録」として公刊された彼の論文²⁴⁾を引用している²⁵⁾。その講義録冒頭には筆者紹介として「NOTICE BIOGRAPHIQUE」があるのだが、投獄云々の記述はない。また、オンライン版の人名事典「Deutsche Biographie」の「Simons, Walter」の説明でも、戦時下の苦境や南米旅行についての記述は無い²⁶⁾。

それでは誰と混同しているのかということ、手がかりになるのは戦時下の行動についての日本工業倶楽部【講演・講義その三】での次の説明である。

御承知の通り戦争勃発するや直に他の二人、ウエバルク及びジュニクルと共に「プロクラメーション」を出して、白耳義局外中立の必要を論じて、カイゼルの行動は独逸帝政の恥辱である、独逸の文明に一大汚点を印したものであると云ふことを論じて、牢獄に投ぜられて一年半の苦みを受け、其後も諸種の迫害に遭って非常に貧困病苦に陥った。戦争が終る頃には非常に健康が悪くなって居りましたが、南米諸国には独逸崇拜者も沢山あります。独逸本国の文化を慕ひ、殊にシモン君の人格に敬意を表して居りましたから、二十箇国の政府が贖金をしてシモン君を聘して二十数回の講演を南米諸国の首府に於てして貰ひました²⁷⁾。

ドイツの学者たちが第一次世界大戦に際して出した宣言として有名なのは1914年10月4日発表の「93人の宣言（Manifest der 93）」および同年

24) Simons, La conception du droit international privé d'après la doctrine et la pratique en Allemagne, *Recueil des cours*, 1926-v, p.516. タイトルの松本私訳：「ドイツにおける法理と実践にみる国際私法の概念」。

25) 折茂豊『国際私法の統一性』（有斐閣、1995年）> 「第5章 国際私法統一の可能性」> 「第4節 公序の超国家性」406頁、注6。

26) <https://www.deutsche-biographie.de/gnd118614541.html> (Otto, Martin, "Simons, Walter" in: *Neue Deutsche Biographie* 24 (2010) , S. 441-443 [online version]; URL: <https://www.deutsche-biographie.de/pnd118614541.html#ndbcontent>)

27) 『著作選』資料 [53] 237-238頁。

10月16日発表の「ドイツ帝国の大学教師の宣言 (Erklärung der Hochschullehrer des Deutschen Reiches)」(「ドイツ帝国大学声明」とも)であり、いずれも安達が言う「シモン」の声明とは真逆にドイツ軍国主義を礼賛し、ベルギー侵攻を正当化するものだった²⁸⁾。

これに対抗して出された反戦声明、署名者の少なさ、起草者の投獄、南米などの点が合致するのは「Aufruf an die Europäer (ヨーロッパ人に対する呼びかけ)」(「1914 anti-war counter-manifesto」とも呼ばれる)と、その起草者、ベルリン大学の生理学講師、医師のゲオルク・ニコライ (Georg Friedrich Nicolai/1874-1964) である。ニコライは草案を知識人や科学者、政治家に署名を求めて送ったが、賛同して署名したのは次の3人のみだった。アルバート・アインシュタイン (Albert Einstein/1879-1955)、哲学者のオットー・ビューク (Otto Buck/1873-1966)、天文学者のヴィルヘルム・フェルスター (Wilhelm Julius Foerster/1832-1921)²⁹⁾。

ニコライは著名な署名者を得られなかったことでこの声明の公表をあきらめたが、1915年夏には一個人として青年に呼びかけようとして、戦争を生物の進化にとって必須とするような主張に反論し、生物学的見地

28) 第一次世界大戦についてのオンライン上の事典「1914-1918-online. International Encyclopedia of the First World War」(<https://encyclopedia.1914-1918-online.net/home/>) の「Making Sense of the War (Germany)」による。https://encyclopedia.1914-1918-online.net/article/making_sense_of_the_war_germany。後記のニコライ『戦争の生物学』冒頭などでも、ニコライらによる「ヨーロッパ人に対する呼びかけ」とともに掲載されている。

29) ただしフェルスターは「93人の宣言」にも署名をしており、それを悔やんでこちらに加わった。また、ドイツでの戦時下抵抗としては、上記のワルター・シュッキングやマックス・ウェーバー (1864-1920) などによるものもあった。参照：中村貞二「『国際協調会』(ドイツ・1911-1914年について)：ヴィルヘルム時代の平和主義および平和運動(1)」『東京経大会誌』146号215-247頁、1986/06/15。竹本真希子『ドイツの平和主義と平和運動：ヴァイマル共和国から1980年代まで』(法律文化社、2017年) > 「第1章 ヴァイマル知識人の思想としての平和主義」 > 「第一次世界大戦と平和主義者」026頁。

から反戦を主張する連続講演を企図したところで政府から軍医として従軍を命じられた。これを拒否したためグラウデンツ (Graudenz) 要塞 (現在のポーランドに所在) に幽閉された。一方で同志が講義録を国外に持ちだして編集、スイスで『Die Biologie des Krieges (戦争の生物学)』として公刊し、上記のニコライらの声明はこれに掲載され、公表された。同書はドイツには入国禁止とされ、ニコライも発行を黙認したとして五ヶ月間収監されるのみか財産を国庫没収された。その後同志の協力を得てニコライは1918年6月にデンマークへ脱出した。敗戦後のドイツで大学教授にもどろうとしたが学生の反発にあいかなわず、1922年には南米に移住し、1964年にチリで没した³⁰⁾。

『戦争の生物学』は、スイス出版の初版も、戦後にニコライ自身が編集した第二版も各国で翻訳された。英訳は1918年にニューヨークで出版された³¹⁾。日本語訳は初版の英訳版からの抄訳が1919年に刊行されている³²⁾。さらに生物学者の山本宣治^{やまもとせんじ} (1889-1929) がニコライ自身から翻訳許可を得て第二版の全訳にとりくみ、前半を1922年に内外出版から『戦争進化之生物学的批判』として発行した³³⁾。その後の山本は産児制限運動や農民運動などに忙殺され、後半の訳業に着手したのは1928年に無産

(30) ニコライの経歴については後記の邦訳版『戦争の生物学』の解説のほか、オンライン版人名事典「Deutsche Biographie」の「Nicolai, Georg Friedrich (bis 1897 Georg Lewinstein)」の説明も参考になっている <https://www.deutsche-biographie.de/sfz71756.html>。

(31) *The Biology of War*, [Internet Archive] 所収: <https://archive.org/details/biologyofwar00nicouoft/page/>

(32) ニコライ著、田制佐重訳『生物学的戦争観』大日本文明協会事務所、1919年12月、<https://dl.ndl.go.jp/pid/953418>

(33) ゲオルグ・エフ・ニコライ著、山本宣治訳『戦争進化之生物学的批判』内外出版、1922年10月、<https://dl.ndl.go.jp/pid/970839>

政党の労農党から立って衆院議員になったのちだった³⁴⁾。しかし完成目前の1929年3月5日に暗殺されたため、翻訳は彼の従弟の安田徳太郎(1898-1983)によって継承、完結し、上下巻ともにロゴス書院刊行の『山本宣治全集』に収録された³⁵⁾。1979年刊の同全集第4巻(汐文社)にも『戦争の生物学』がおさめられている。

ワルター・ジモンスの方は、1920年に外相になった際の日本の新聞記事にて、次のように評されているが、戦時下では特筆されるような積極的な反戦行動はしていなかったと見られる。

新外務大臣のワルテル・ジモンスは今年五十九である。右党が政党大臣でなく是非対門大臣を入れなければならぬとの請求の下に大臣になった官僚大臣の一人である。併しジモンスは官僚出身者ではあるけれども、どちらかと云へば独逸外交官中でも新派に属する国際法専門の一人で、彼の旧式な軍国主義帝国主義的な独逸派の外交官の伝統は引いて居ない、デモクラシーの思想、国際連盟の思想にも了解の深い人物である、彼のヴェルサイユの平和条約締結の前及び締結中ジモンスはブロックドルフランツァウ伯の、顧問として大に働いたもので、通牒の中にはジモンスの起草したものが澤山ある、人間は賢明で、戦前から外国の会議にも度々出席した経験があつて、人づきはいゝ、一九一九年六月にヴェルサイユ平和条約調印事件で外務法律局長を辞したがミュルラー外務大臣の推薦で其年の九月に独逸工業同盟の専務のやうな役をして

(34) 成澤榮壽「山本宣治の人権擁護・反戦活動：没後七五周年に学ぶ」『人権と部落問題』56巻4号、2004年、059頁。

(35) 佐々木敏二『山本宣治(上)』(不二出版、1898年)266-268頁。『戦争の生物学』上巻は1929年9月刊行の第1巻(<https://dl.ndl.go.jp/pid/1184339>)に、下巻は1931年2月発行の第2巻(<https://dl.ndl.go.jp/pid/1184353>)に収録された。

るたのが、今度外務大臣になったのである³⁶。（※文中の振り仮名は一部を略した。）

その彼に安達は、戦時下のドイツで皇帝に対して法に基づいて異議申し立てをおこない、そのために迫害され困窮に瀕しても自説を曲げなかった勇敢な人物としてのイメージを付与したわけである。十数年前のこととはいえ、「友人」について事実と異なるプロフィールを複数回も述べていることには、なんらかの意図を感じざるをえない。

とはいえ、この混同が意図的なものかどうかを検証するには、安達自身とワルター・ジモンズやニコライとの関係、当日に聞いていた聴衆はどのようにこの“混同”を受け取ったのかを知る必要があるが、本稿ではまずはニコライの行動が日本でどう受容されていたのかを確認しておく。聴衆のなかには、安達が「シモン」のプロフィールとして述べている最中に、その（意図的かどうかをとわず）混同に気づいた人がいるかもしれないのである。

3) ニコライの反戦行動と日本人

（1）ニコライの行動の報道

日本でのニコライの反戦行動の最初の報道がどれかは未確定だが、ニコライが医者であることもあってか、医師がまず注目したようである。

ドイツがロシア革命をへたソ連と単独講和をおこなった1918年3月の頃、業界誌の『日本之醫界』234号（3月1日）の「海外近事」欄に「ニコライ教授の幽禁」と題する次のような記事が載った³⁷。

³⁶ 東京朝日新聞1920年9月5日（東京／朝刊）掲載のベルリン特派員の名倉聞一による署名記事「新内閣決定まで（六）」。

³⁷ 『日本之醫界』234号（1918年3月1日）013頁、<https://dl.ndl.go.jp/pid/1618625/1/7>。

パリ
巴里プロGRESS、メヂカル誌の報ずる所に依れば、^{さき}嚮に独逸宮室の侍医にして、現に伯林大学の生理学教授たるジー、エフ、ニコライ氏は、カイゼルの忌諱に触れ、さる要塞に幽囚の身となり、其の私財は悉く没収の厄に遭ひたりと云ふ。同教授此の程“^{ことごと}The Biology of War”「戦争の生物学」と題する一書を著^{あら}はし、独逸の科学者並に軍略家の戦争遂行に関する非人道的手段を論難したる為めにして、其の一節に曰く、

『現代独逸に於て、最も著名なる軍略家の一人は余^{おとな}を訪うて、敵国に悪疫の流行を来さしむべき方策無きや、と迫り、且虎列刺菌^{かつコレラ}其の他伝染性疾患の病原菌を砲弾に装置し、之れを敵の戦線の背後に発射し、其の爆弾炸裂と共に、菌は忽ち八方に飛散し、以て敵軍をして、瘴癘^{しやうらい}に悩ましむるの方策は如何、と質問したるより、余は大に憤激して、人道を無視し、国際法の許さざる、不当、凶暴なる手段に出づるは、断じて独逸の名誉にあらざるべし、と答ふ。同将校、冷然一笑して、「勝たんが為めには、人道を顧みるの違無く、殺さんが為めには手段を選ばず。独逸は敵を倒さんが為めに必要ならば、如何なる方策を用ふるも自由ならずやと。余啞然、又た言ふ所を知らざりき。〔以下略〕³⁸（※傍点は原文の

38) ここで説明された生物兵器の使用方法は、のちの日本軍、通称「石井部隊」による細菌戦を思わせるが、当時はまだ国際法上の禁止規定はなかった。しかし第一次世界大戦下で毒ガス兵器が実戦使用されたことで、戦後、化学兵器と生物兵器の戦時使用を禁ずる国際条約が「毒ガス等使用禁止に関するジュネーブ議定書」として1925年に作成され、日本も署名し、1928年に発効した（日本の批准自体は1970年）。その後発展し、生物兵器禁止条約（BWC）となっている。参照：外務省ウェブサイト＞生物・化学兵器の軍縮・不拡散に関する我が国の取り組み <https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/bwc/index.html> ＞窒息性ガス、毒性ガス又はこれらに類するガス及び細菌学的手段の戦争における使用の禁止に関する議定書（仮訳） <https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/bwc/pdfs/01.pdf>

まま。）

その半年後、11月の停戦まで三ヶ月を切った1918年8月29日付けの読売新聞にてニコライの亡命、国外脱出が報道された。「海外新聞」というコラムで、「独逸国内の革命運動」と題した記事と共に「飛行機で亡命」と題した短信が載ったのである。全文は以下の通り（一部のふりがなを省略した）。

独逸の^{べるりん}伯林大学心理学の教授ニコライ^{はかせ}博士は、独逸の軍国主義を攻撃して所罰〔ママ〕を受けてゐたが、最近飛行機に搭乗して^{でん}丁抹国に亡命した。尚^{なほ}彼^かと行^{かう}を共にした平和論者は四名で、アルバトロス式^{だい}二臺に分乗したのである。

そして翌年の1919年末には上記の『戦争の生物学』の抄訳が発行された。記者は大日本文明協会の編集部員、在野の翻訳家の^{た せいすけしげ}田制佐重（1886-1954）である³⁹。

（2）医師、科学者から見たニコライ

大戦までの科学界をリードしていたのはドイツだったが、戦時下からすでに上記の「93人の宣言」のような行動はドイツの敵国となった国々から意外性を持ってうけとられ、批判されていた。休戦の前月の1918年10月、英仏米や日本をふくむ連合国側諸国の科学者らが、既存の万国学術連盟から脱退し、新たな連合会を組織することを決議した。いわばドイツやオーストリアの学者の追放運動である。

ドイツ在住とおぼしき「かゑむ老」という人物は、業界週刊誌の『医

³⁹ 田制は日本の敗戦後には早稲田大学講師となった。経歴について参照：竹村英樹「田制佐重の教育社会学：研究史および生活史から（II-1 部会 理論研究）」『日本教育社会学大会発表要旨集録』（46号、1994年）048-049頁 <https://dl.ndl.go.jp/pid/10618426>

海時報』1920年5月15日付けにて、上記の追放運動と、フランスのアカデミーからのドイツ人科学者批判を紹介し、「さてはさうであるか、例のニコライをして、『戦争の生物学』^{あわ}を著はしめたる動機、即ち九十三名の独逸大学教授連の宣言書が、却て世界の学界より独逸の学者を除けものになさしめたる本来の理由であったかと、始めて〔ママ〕腑に落ちる」として、『93人の宣言』の署名者リストを紹介し、その中には医学者7名、自然科学者15名がいたとした。そして、ニコライの共同声明起草や講義計画を紹介したうえで、次のように『戦争の生物学』の一読を推奨している。「私は此の書 G. F. Nicolai, Die Biologie des Krieges. Betrachtungen eines Naturforschers den Deutschen zur Besinnung. を日本の学者のどなたにも一読していただきたく願ふ、二冊とは言へど五百三十一ページの巻である、無論小説を読むやうに、寝て居てもすらすらと読み進み得べき文字ではない。嗚呼ニコライ氏は稀代の豪傑である、日本にもたまには斯ういふ学者をほしい、百年にしても一人たりとも、いや二百年にして一人たりとも。」⁽⁴⁰⁾

この呼びかけには早速読者からの応答があった。福島県若松市の開業医、渡部鼎^{わたなべかね} (1855-1932) が、すでに『戦争の生物学』を昨年に読んで感動、地元の医師仲間の会合で同書の内容を紹介したとして、その談話の大要を『醫海時報』に寄稿、一ページ全面を使って掲載されたのである。渡部は軍医として西南戦争から日露戦争まで従軍した経験を持つ人物だが、ニコライを次のように評した。「ニコライ氏は熱心なる愛国者である。然しながら帝国主義^{いわゆる}所謂^{すこぶ}ミリタリズムには反対であるとは云へ、論ずる所頗る公平無私、縦横無盡、戦争の残忍冷酷を示摘するも偏せず、^{むじん}畢竟、彼は国家ならばイザ知らず、^{ひつきょう}一英雄的の野心家の為めに徒らに一身を犠牲に供するは、人生の能事に非

(40) かゑむ老「西航ところどころ 十九、独逸国内今如何の噂 二。」『醫海時報』1351号 (1920年5月15日) 017頁、<https://dl.ndl.go.jp/pid/11183930/1/9>。

ずとするの乎の様に窺はるゝ。」⁽⁴¹⁾

また、ニコライの行動を平和主義のみならず国境を超える科学の普遍性の表れとしてとらえた科学者もいた。1921年5月8日の工業化学会⁽⁴²⁾の第二四年会にて、九州帝大教授で工学博士の丸澤常哉⁽⁴³⁾ (1883-1962)が「学術の研究と国際関係」と題する講演のなかで、上記の戦後のドイツ、オーストリアの学者の追放運動と「93人の宣言」の両方を批判するとともに、ニコライの1919年版『戦争の生物学』原著を引用、ニコライら三人による「公開文」を紹介、支持したのである⁽⁴³⁾。「学術の目的は眞理の討究闡明に在り 眞理とは國家及民族の差別或は一時の利害關係から打算されたる敵味方の關係を超越して全人類に普遍的のものであらねばならぬ 是学術に國境なしと云ふ所以であると信ずる」 こうして丸澤はドイツやオーストリアの科学者に責任を負わせて学界から排除す

(41) 渡部鼎「ニコライ博士に就て」『醫海時報』1355号 (1920年6月12日) 010頁、<https://dl.ndl.go.jp/pid/11183934/1/6>。談話をした会について渡部は「若松市益友医会常会」としている。若松市は当時は同名の市が福島県と福岡県それぞれにあったが、同誌の他の箇所での渡部の登場の仕方から福島県と判断した(現在は会津若松市)。渡部は福島県野澤村(現在の西会津町)出身で、軍医として勤務後にアメリカに留学、サンフランシスコで開業医をしたのち帰国していた(『日本現今人名辞典 訂正3版』1903年、<https://dl.ndl.go.jp/pid/782773/1/204>)。若松市で開業してまもなくの1892年に、野口英世(当時は清作/1876-1928)の火傷の後遺症で癒着していた左手の切開手術をしたことでも著名な人物である。参照：公益財団法人野口英世記念会ウェブサイト>野口英世の生涯 <https://www.noguchihideyo.or.jp/person/history.html>

(42) 工業化学会は工業化学関係者の学会として1898年(明治31年)設立。初代会長は榎本武揚^{えのもとけあき} (1836-1908)。敗戦後に日本化学会と合同し、現在は公益社団法人日本化学会となっている。公益社団法人日本化学会ウェブサイト>沿革 <https://www.chemistry.or.jp/societyguide/organization/history.html>。

(43) 講演録は丸澤常哉「学術の研究と国際関係」として『工業化学雑誌』24巻7号(1921年7月5日)818頁～827頁に掲載(https://doi.org/10.1246/nikkashi1898.24.7_818)。丸澤はのち1937年から満鉄中央試験所の所長を務め、日本の敗戦後も率先して同地に留まり、最後の旧所員とともに帰国したのは1955年だった(廣田鋼蔵「(随筆)丸澤常哉先生言行録」『生産と技術』(社団

ることに反対し、日本の文部省の二枚舌を次のように批判した。「又我國の文部省では其學士院の代表者を派邊して獨逸排斥の決議に参加せしめ^{なが}乍ら陸続として海外研究員を獨逸に送り込んで居る。學術の研究には信用なくば効果がない。野蛮なる獨逸には信用なき故之を排斥すると決議したる舌の根の乾かぬ間に大切なる我國の青年學徒を獨逸に送って何を學ばせむとするのか」⁽⁴⁴⁾ただ、以上の紹介をしたかゝる老、渡部、丸澤は、三人とも日本語訳（田制佐重による抄訳書）には言及していない⁽⁴⁵⁾。

(3) 哲学者から見たニコライ

以上のような医学者や科学者のほかにも、ドイツ文明の全面的否定を避けるべき理由として、そのドイツで例外的な行動をとったニコライに言及する者もあった。

宗教学者で東京帝大教授の姉崎まさはる^{あねさきまさはる}（1873-1949）は戦後のフランスを訪れた経験を一端として、1920年8月に大学で「宗教と文化との相関交渉」についての公開講義をおこなった。「第六講 現代文明の危機と精神的原動力」にて、今回の大戦を「十九世紀の病毒を爆発させた標本」としてあつかい、その「世界文明に生じた癌腫についての臨床講義として」ドイツの例を引くなかで次のようにニコライについて触れている

法人生産技術振興協会）36巻2号（1984年春号）002-005頁／<http://seisan.server-shared.com/362/362-2.pdf>。

(44) 同上講演録818頁、825頁。講演録は一文ごとの分かち書きが無いため、引用にあたり一字あけを補った。

(45) 丸澤はスイスで刊行された1919年のドイツ語版を九州帝大で同僚の宮入慶之助^{みやいりけい}（1865-1946）から借りたと謝辞を書いている（講演録827頁）。宮入は1913年に日本住血吸虫の中間宿主を小巻貝（のちに「ミヤイリガイ」と命名）から発見したことで有名な人物で、1919年から1920年まで欧米各国に出張しており（宮入慶之助記念館＞宮入慶之助の略歴 https://miyaiirikenkan.com/keinosuke_miyairi/ryakureki/）、原著はその際に入手したものであろう。

（「大戦の責任もドイツのみが負ふ可きでない」ともしているが）。ドイツが勢力を拡張してきた要因としては財力と武力と学術の力があるが、帝国主義の影響が強い。「ドイツ人は元来研究心に富むので居るが、ドイツの学術は、この五十年来帝国主義の忠実なる僕婢となり、大学教授は、何れの方面に於ても、御用学者が多くなった。然し戦争中にも、厳正に軍国主義を批評した者もある。茲に其の中の一人を紹介すれば、ニコライがある。彼はバルリン大学の生理学教授で、「戦争の生物学」といふ一書を著し、戦争は生物の変態で、今度の戦争はドイツにとっては自殺であると論じた。彼は其の為に監獄に入れられたが、何処から飛行機を持ち出したか、之を操縦し、飛行機に乗ってデンマークへ逃げながら、ドイツ国民に対する告別の辞を空中から配った。告別の辞は悲痛を極めたもので、誤られた生存競争説に欺かれて、戦争を初めた〔ママ〕ドイツは禍なる哉、其の誤謬なるは、単に生物学者として見てもよく解ると誌してあつた。然もこれは、ドイツ国民一般が、必ず戦に勝つと期待して居た時の出来事である。」⁽⁴⁶⁾

つづけて姉崎は、「近代ドイツの病」を次のように指摘するが、これは自国に対する戒めでもあろう。

何れの国にも、国家の為す事は何でも賛美するといふ傾向に偏すると、人民が盲目になる。国家に反省のない謳歌は危険である。世論の一致は望ましいが、無理に一致させては、反動を起す危険がある。国民の耳目を蓋うて、密かに仕事をするのは伶俐な様であるが、国民に反省と理解がなければ、国運の前途は實に危い。古語にある如く、一人の手を以て萬人の明を蔽ふべからず。政府が、為す事を秘密にし、実際の状態を蔽ひ隠し、都合のよい所だけを発表し、国民の判断に正当の材料を供給しないと、判断力の

(46) 姉崎正治『社会の動揺と精神的覚醒』（博文館、1920年）228-233頁、<https://dl.ndl.go.jp/pid/969326>。

喪失から、良心の^{いび}萎靡を来す。ドイツでは政府と学者と相助けて、此の危策を執った。近代ドイツの病は、正しくここにあった⁽⁴⁷⁾。

姉崎は、このようなドイツ文明に対する批判的立場を得たのは、二十年前のドイツ留学中に師事した「ドイツの学者ドイッセン先生」が「ドイツの欠点」を指摘してくれたおかげだと書いている。「ドイッセン先生」とは、インド学の権威、パウル・ドイッセン (Paul Jakob Deussen / 1845-1919) であろう。ドイッセンは戦時下のドイツで講義を続けた結果、「ドイツ気風の犠牲となって遂に倒れられた。僕は茲にドイツ文明を批評するに際し、先生から与へられた批判的立場を感謝すると共に、ドイッセン先生の痛ましい最後を追懐したい。」⁽⁴⁸⁾ 姉崎は国際連盟協会の理事にもなっており、国際協調論者としても著名であったが⁽⁴⁹⁾、その行動の背景にはいかなる文明も絶対視しない視点があったのである。

(4) 平和主義者から見たニコライ

国際連盟によって国際協調の気運が高まる中、なお各国が軍備拡張競争をおこなっていることに懸念をしめし、軍縮を主張する人々もニコライに注目していく。

キリスト教徒で社会運動家でもあった賀川^{かがわとよひこ}豊彦 (1888-1960) は1920年の著書『人間苦と人間建築』で、『戦争の生物学』を引用している。

(47) 同上233-234頁。

(48) 同上235頁。このように留学先の国を批判するという行為は、一部からは奇異な目で見られた。ドイツ留学時にドイツ文明の危険性を指摘した姉崎は次のように非難されたという。「日本にゐた某君達は、姉崎はドイツへ勉強しに往ってドイツの悪口を云って居るが、狂人になったのではないか、と云った。」(同上234頁)

(49) 参照：小林啓治「二大政党制の形成と協調外交の条件」(井上寿一編『日本の外交 第1巻 外交史戦前編』、2013年、岩波書店所収) 134頁。

戦争が「経済的国家組織から起ったものでは無く、全く心理的盲目衝動から起るのだと云ふ」説や、「戦争のみが、文明を産む様なことを云ふもの」を批判して、ニコライの戦時下抵抗と『戦争の生物学』を下記のように紹介する。

それに就て、前独逸皇后陛下の侍医で有って有名な心臓学者ニコライ教授 Prof. G. F. Nicolaiが非軍国主義の為めに戦時中投獄せられ、獄中で書いた彼の名著『戦争の生物学』“The Biology of the War”の中に云ふて居る。『動物が衰滅に近づく時にその動物は必ず破壊的になり、戦争を好むものである』とつまり戦争を讚美する本能も全くこの衰滅期に於ける一種の錯覚と考へる事が出来るのである。それであるから私は戦争を本能的本質あるものとして讚美する人々にも賛成出来ないのである⁵⁰。

同様にニコライの生物学的分析をもとに、戦争本能をおさえて戦争をやめないと戦争によって人類は滅亡するとの危惧のもと軍縮を主張する人々もいた。総合雑誌『新公論』1920年6月号で社会運動家の岡梯治おかていじがゲオルク・ニコライの『戦争の生物学』を引用している。人類の中に種々の主義者がいるように鳥獣虫類のなかにも平和主義者や軍国主義者がいるとして、それぞれ必要に応じた生物学上の原因があるとして、虫の蟻が軍国主義者で、人間と同様に同属間で争闘をおこなうのは「国家的団体的生活」をおこなうため、戦勝者は戦敗者を捕虜にするなどの利益があるからだとする。そこでニコライに次のように言及する。

此れに関して独逸のニコライは「戦争の生物学」に於て論じて曰く、人類間に戦争の絶へないのも、勝者が敗者の捕虜を奴隷とし、其貯蓄物資を奪ふ事が出来る為である。…<中略>… 然し乍ら此度の大戦乱が證した如く、人類も武器進歩の結果、獅子や

50) 賀川豊彦『人間苦と人間建築』（警醒社書店、1920年4月）132-133頁、<https://dl.ndl.go.jp/pid/930993>

虎の如く、勝者も敗者も共に利益がないやうになったから、其の戦争本能を制して平和な生活を行ふやうにしなければ人類は戦争の為に滅亡を免れないと⁵¹⁾。

1921年には、『戦争の生物学』に序文を寄稿していたフランスの思想家、ロマン・ロラン (Roman Rolland/1866-1944) が大戦期に執筆した記事をまとめた本『先駆者』が邦訳刊行され⁵²⁾、さらに同書の抜粋を紹介する本も翌1922年に刊行された⁵³⁾。『先駆者』は、「全世界を挙げての戦争の暴風の中にあり、世界的反動の中にありながら自己の思想の自由を失はず、その国際的信仰を破棄しなかつた少数の勇敢な人々」として、パートランド・ラッセル (1872-1970) やニコライらのことを書いたとしている⁵⁴⁾。

(5) 『国際連盟』誌上での連載

以上の姉崎や賀川たちはいずれも『戦争の生物学』のどの版をもとに書いているのか、また邦訳について言及していないが、対外関係、国際

51) 岡梯治「社会生活の科学的研究 (一)」『新公論』35巻6号 (1920年6月) 087-088頁、<https://dl.ndl.go.jp/pid/11005586/1/50>。岡は当時の国家主義団体「老社会」(1918-1922)に属し、右翼思想家と目されているが、大戦開始後まもなくの1915年の段階の「戦後に於ける平和主義勝利の予想」と題した論稿で、大戦終了後には「漸次世界平和維持の一大同盟を現出せしむべきは瞭々火を賭るよりも明白なる事である。」と論じていた(『新公論』30巻11号(1915年11月)031頁、<https://dl.ndl.go.jp/pid/11005530/1/24>)。

52) ロマン・ロラン著、細木盛枝訳『先駆者』世界思潮研究会、1921年4月、<https://dl.ndl.go.jp/pid/969284>。原著は*Les Précurseurs*, 1919で、その1920年英訳版*The Forerunners*を訳したもの(同書冒頭の「訳者より読者へ」)。

53) 岡田哲蔵「ロマン・ロランの先駆者」(岡田哲蔵『知られざる傑作：およびその他の評論』ロゴス社、1922年9月、248-280頁所収、<https://dl.ndl.go.jp/pid/970259>)。岡田哲蔵(1869-1945)はキリスト教徒で宗教哲学者。

54) 前掲『先駆者』>「序」001頁。ロマン・ロランとのニコライとの親交について参照：片山敏彦等訳『ロマン・ロラン日記 1914-19 第5』みすず書房、1957年5月、<https://dl.ndl.go.jp/pid/1694894>。

問題に関心を持つ日本人に『戦争の生物学』を普及させる契機になったと思われるのが、国際連盟協会の機関誌『国際連盟』において1921年から1922年にかけて訳文が連載されたことである。

まず1921年9月号がニコライのプロフィールや同書の由来を説明したのち、同書冒頭の第1章の動物的本能と戦争との関係の箇所を訳載した⁵⁵⁾。ついで10月号で同じく「生物学より見たる戦争」と題して同書の「第二章 戦争と生存競争」を訳載⁵⁶⁾、11月号で「第三章 戦争淘汰」⁵⁷⁾、12月号「第四章 国民に及ぼす戦争の利害」⁵⁸⁾、1922年2月号「第五章 軍国主義の起源」⁵⁹⁾、3月号「第四編の前半紹介」として「愛国心の研究」⁶⁰⁾、4月号「第一巻第三編後半紹介」として「愛国心の墮落」⁶¹⁾、5月号「戦争と平和の文学」⁶²⁾とつづいた。

これらの訳者、紹介者は同誌上には表記がない。ただ、訳文や訳して

55) 「生物学より見たる戦争」『国際連盟』1巻6号(1921年9月)082-091頁、<https://dl.ndl.go.jp/pid/10985991/1/45>。

56) 「生物学より見たる戦争」『国際連盟』1巻7号(1921年10月)081-090頁、<https://dl.ndl.go.jp/pid/10985992/1/45>。

57) 「生物学より見たる戦争」『国際連盟』1巻8号(1921年11月)081-091頁、<https://dl.ndl.go.jp/pid/10985993/1/46>。

58) 「国民に及ぼす戦争の利害」『国際連盟』1巻9号(1921年12月)084-092頁、<https://dl.ndl.go.jp/pid/10985994/1/48>。

59) 「軍国主義の起源」『国際連盟』2巻2号(1922年2月)049-057頁、<https://dl.ndl.go.jp/pid/10985996/1/27>。

60) 「愛国心の研究」『国際連盟』2巻3号(1922年3月)024-034頁、<https://dl.ndl.go.jp/pid/10985997/1/15>。

61) 「愛国心の墮落」『国際連盟』2巻4号(1922年4月)041-048頁、<https://dl.ndl.go.jp/pid/10985998/1/25>。この記事の後半は「ニコライ教授のドイツ脱出記」というもので、「紹介者は此の処を借りて、ニコライが本書を出版する迄に遭遇した事件を、主としてロマン・ローランの記述によって左に紹介したい。」と記述している(044頁)。「ロマン・ローランの記述」は上記の『先駆者』を指すとみられるが、その記述は細木盛枝の訳文の単なる引用ではない。

62) 「戦争と平和の文学」『国際連盟』2巻5号(1922年5月)023-035頁、<https://dl.ndl.go.jp/pid/10985999/1/15>。

いる箇所の違いから、上記の田制佐重による抄訳書の転載ではないのは確かである。また、同誌の1922年2月号では『戦争の生物学』訳文の直後に据えた「新著紹介」と題したコラムにて、山本宣治による訳が近刊予定だとして次のように紹介している。

「ニコライ教授者」 Die Biologie des Krieges 邦訳は京都帝国大学医学部講師理学士山本宣治氏の手により今春完全なる邦訳上梓さるゝことゝとなった。山本氏は京大医学部附属大津臨湖実験所に於て目下研鑽せられつゝある生学専攻の士。ニコライ教授の名著が本邦の生物学界に、斯道の専門家の手により紹介せらるゝことは欣喜に堪へない。尚該邦訳には訳者の研究の結果をも脚註として挿入せらるゝ由、本誌に紹介せるニコライ博士の所論を見られたる方々には進んで該完訳に就き、ニコライ博士の蘊蓄に直到せられんことを希望して已まない⁽⁶³⁾。

この予告通り、また本稿冒頭に述べたように、山本宣治による翻訳は1922年10月にまず上巻が発行された⁽⁶⁴⁾。さらに山本は同年12月に、改造社の招待で来日して京都に来ていたアインシュタインから推薦の辞を得ている。アインシュタインはニコライとともに上記の声明の署名者ではあったが、専門以外のものには序文推奨文を書いたことがないと拒絶したところを、山本が平和運動の為と強くせまったことで書いてもらったものである⁽⁶⁵⁾。その推薦の辞を載せた訳書が発行されたのは上記のよう

(63) 前掲、『国際連盟』2巻2号、057頁。

(64) 以上の三つの訳はそれぞれ訳しぶり、訳語が異なっている。一例を「第一編 第一章 好戦本能」より挙げる。田制訳「バヴァリア人は麦酒を痛飲して粗暴となり、英国水兵はウイスキーを飲んで拳闘を試み」(003頁)→国際連盟1921年9月号訳「バヴァリア人はビールを飲むと乱暴になり、イギリスの水夫はウイスキーを飲んで来ると拳闘を振り回す。」(85頁)→山本訳「即ちバエルン人がビールをのめば乱暴をする、好加減ウイスキーを聞こし召した英吉利のマドロスは拳闘を揮り廻す」(004頁)

(65) 前掲、佐々木敬二『山本宣治(上)』288-289頁。

に山本の死の半年後であった⁶⁶⁾。

（6）軍縮、国際協調論者から見たニコライ

『戦争の生物学』邦訳の連載が『国際連盟』誌で始まっていた1921年11月から翌年にかけてワシントン軍縮会議が開かれた。これにあわせて10月に朝日新聞社が軍縮を支持する連続講演会を関西にておこなった。「今次欧州戦争の実物教訓は武備偏重の世界的標本国たりし独逸、奥多利及び露西亜の三大帝国を、自滅の崩壊に陥れた。武備偏重は総て其の国を亡ぼすものである事を、『論より証拠』を挙げて明示した」との問題意識のもと、尾崎行雄（衆議院議員／1858-1954）と末廣重雄（法学博士／1874-1946）とともに、朝日新聞編集局長の高原操（1875-1946）が講演した⁶⁷⁾。

高原は「軍備縮小と国民教育」と題した講演で次のようにニコライに触れた。ドイツの学者らがベルギー中立侵犯を正当化するため「勝手な理屈を列べた何十箇条を拵へて、諸外国に独逸は正義の為に、戦ふとの偽造の宣伝をしたことがある。」「其の時に一人、唯一人の伯林大学教授でゲー・エフ・ニコライと云ふ未だ四十五六歳の生物学の教授」が『『戦争に関する生物学』と云ふ書物を書いて、曲学阿世の俗物腐儒を驚かした。」「氏の主張に拠れば戦争は嘗ては必要であった。併しながら今日は否〔ママ〕らず。学者迄が戦争の必要を高唱する如きは世界人類の為に

66) 1929年9月刊行の『山本宣治全集』第1巻の冒頭にはアインシュタインがホテルの用箋にしたための推薦の辞の写真も掲載された。これは暗殺される四日前に彼が編集者の高倉輝（1891-1986）に伝えた希望による（同書末尾に所収の高倉輝「編輯者の言葉」）。推薦の辞の日本語訳は「アインシュタイン教授の日本訳戦争の生物学のための序文」として掲載された（001頁）。

67) 大阪朝日新聞社編『朝日講演集 第6輯』（朝日新聞合資会社、1921年11月）の「序」「凡例」「講演目次」より。<https://dl.ndl.go.jp/pid/946573>。

大いなる誤りである、従来社会的科学の基礎であった生物学上の戦争は人類に有利であるとの理論は変るべき筈である、と極力主張した。」そして、「今日の我々はもう大概なところで、馬鹿な軍備競争は止めにした⁶⁸」として、軍縮を要求したのである⁶⁸。

1924年には、ドイツの国際法学者のハンス・ウェーベルク (Hans Wehberg/1885-1962) がニコライを含めたドイツの平和運動家たちを紹介した本⁶⁹の抄訳が会員制の月刊誌『日本読書協会会報』にて掲載された⁷⁰。訳者で同協会特派員、法学士の安孫子理兵衛 (1894-1969)⁷¹は同書について、「本書は一八九〇年より一九二三年までの間に活躍せし、著名なる独逸の平和運動者十二名を拉し來りて、スケッチ風に風に叙したるものであつて、最近三十年間に於ける独逸の平和運動小史とも見ることが出来る。」としている⁷²。掲載誌『日本読書協会会報』の購読料

(68) 同上080-081頁、084頁。なお原文はすべての漢字に振り仮名があるが、引用にあたっては一部を除き省略した。

(69) Dr.Hans Wehberg : *Die Führer der deutschen Friedensbewegung*. Ernst Oldenburg, Leipzig, 1923. 安達峰一郎が日本工業倶楽部での【講演・講義その三】で、「シモン」とともに「プロクラメーション」を発した人物とした「ウエベルク」は、おそらくこのウェーベルクを指していたのだろう。

(70) 安孫子理兵衛「独逸の平和運動者 (ウエーベルク著)」『日本読書協会会報』43号 (1924年5月) 117-139頁、<https://dl.ndl.go.jp/pid/3560207/1/63>。

(71) 安孫子理兵衛は山形県柴橋村 (現在の寒河江市) 出身で山形中学と一高を経て東京帝大法学部独法科を1920年に卒業しており、同期に我妻榮や岸信介がいる。また、「安孫子さんは帝大時代には革新団体たる新入会の一員で、社会主義の信奉者だった」と死後に追悼文集で回想されている (川島順平「安孫子さんと私」(『安孫子理兵衛 思い出』樋口朔三発行、1971年9月) 044頁)。安孫子は1921年に日本読書協会特派員として渡欧し、ドイツでヒトラーが首相となった1933年に帰国。企画院、ついで外務省に勤め、敗戦後は弁護士となった。なお追悼文集は山形県立図書館と山形市立図書館に所蔵があり、本稿では市立図書館所蔵書を利用した。

(72) 前掲、安孫子理兵衛「独逸の平和運動者」117頁。こう述べて安孫子は12人の紹介をしているが、原著では22人が載っている。

は高額なため読者層はごく限られていたが⁷³、冒頭にあげた一連の安達峰一郎の講演を聞いた人々のような政財官界とジャーナリズムの上流層に、ニコライの活動とともにドイツの平和運動の情報がまとまった形で伝えられたわけである。

そして1925年には『戦争の生物学』は中学の修身の参考書において挙げられるに至った。倫理学者で東京高等師範学校教授・東京帝大教授の友枝高彦^{ともえだたかひこ}（1876-1957）が、自身が書いた修身の教科書のための参考書⁷⁴にて必読書として挙げたのである。「集団精神」について触れた項で「集団利己主義に注意せよ」と題して、「すべての社会集団は、個人と同じくその自己の集団生活を、何よりまさって重要なものと、考へる傾がある。故に人類は、国家・人種・階級等の利己主義に陥る危険がある。」と指摘したうえで次のようにニコライを紹介した。「国際間の衝突」は「これは謂はゆる国家利己主義（State Egoism）から来るのであって、愛国心と似^え而非^せ愛国主義即ちシヨウヴイニズム（Chauvinism）とを混同したものである。〔改行〕伯林大学生理学教授であったニコライ博士（G. F. Nicolai）は「戦争の生物学」で（“Biology of War”原文はドイツ文である）といふ書に於て愛国心とシヨウヴイニズムとの区別を論じて後者の特質を左のやうに述べて居る。」そして「特質」の概要を引用したうえで、「世界戦争前からの国際関係を説明しようとしたならば、このシヨウヴニズムに求むる外ないといつてよい程である。〔第四卷第十二課「国際連盟」

73) 『日本読書協会会報』は外国の新刊書籍の紹介を目的にした会員制の月刊誌で、1921年から1944年まで発行された。ゆまに書房が復刻しており、1941年から1944年の終刊までの分が2008年に『書誌書目シリーズ87／戦時下における外国文献解説』、1938年から1941年までの分が2012年に『書誌書目シリーズ100／戦時下における外国文献解説Ⅱ』として刊行された。参照：宮里立士「刊行のことば」（ゆまに書房ウェブサイト掲載／<https://www.yumani.co.jp/np/isbn/9784843329122>）。

74) 『中学修身参考書』改訂の部（非売品）、富山房、1925年10月、<https://dl.ndl.go.jp/pid/917794>。

参照) 我等は我が国将来の国際的關係に鑑み十分周到なる要する所である。」と注意を促している。そして「参考」と題して、ニコライ教授が戦時下で「ベルジック占領、ルヴァンの大学の破壊などに対しては抗議的意見を発表した」ために迫害され、デンマークに逃れた経緯にも触れたのち、次のように一読を推奨している。「彼は祖国を愛することは他の同胞に譲らぬが、理智の判断を無視することは出来ぬと居る。その書中にドイツのある司令官から敵陣の後方にコレラなどの**ばいきん**を撒くことについて相談を受けたことなどをも書いて居る。「戦争の生物学」は一読すべき書である。」⁽⁷⁵⁾

こうした記述の背景にあるのは、やはり大正デモクラシーの風潮と国際連盟の誕生だろう。教育学者の**しも じ けいじょう**下地恵常(1904-1995)は、修身教科書に欧州大戦後の世界の平和と国際連盟がとりあげられたことについて、「国内情勢と国際情勢におかれて、修身教科書にも国際問題がとりあげられた。まさに社会科の開眼である。」と指摘している。さらに、友枝高彦が『教育時論』1924年5月5日、15日両号にて「国際教育に就いて」と題して修身について論じた内容が事実上、軍国主義の批判となつて居るとしている⁽⁷⁶⁾。友枝自身はすでに上記の姉崎正治などとともに国際連盟協会の発会に参加し、協会理事をつとめていた⁽⁷⁷⁾。

(75) 同上書、巻四の「第五課 集団精神」>「(3) 解義」>「三、集団利己主義に注意せよ」021-022頁。ただし、友枝は『戦争の生物学』の一読を推奨しつつも、同書の邦訳は紹介していない。訳者の一人、山本宣治が左派の社会運動に参加し、1924年には京都帝大を追放されていたことをおもんばかったのか(形式としては山本からの依頼退職。参照：佐々木敬二『山本宣治(下)』1998年、017頁)。

(76) 下地恵常『現代社会科教育法』(成文堂、1966年1月)>「第一章 戦前社会科の消長」>「第三節 国定教科書の内容の変遷」>「二 第三期(大正七年)」031-032頁、<https://dl.ndl.go.jp/pid/3044652>。

(77) 『国際連盟』1巻1号掲載の「国際連盟協会々報」>「(一) 協会成立事情および「(二) 発起人会」002-003頁。

4) 小括

以上より、戦時下抵抗をしたドイツ人としてのゲオルグ・ニコライは大戦後、そして戦間期の日本において、知識人からは一定の認知を得ていたと言って良いと思われる。そしてそれは戦間期に高まった国際協調主義の一つの象徴なのかもしれない。その後は安達の1930年の講演の翌年には満州事変がおき、ニコライの主張に共感して似而非愛国主義や軍国主義に危惧を示していた自由主義者たちにとっての逆流が強まったからである。すでに記者の山本宣治は暗殺されており、山本とは対極的な立場であって安達の【講演・講義その三】で開会挨拶をした団琢磨もまた1932年3月に暗殺される（血盟団事件）。軍縮支持の講演会で熱弁をふるっていた高原操は朝日新聞の社論を満州事変支持に変更した⁽⁷⁸⁾。日本の国際連盟協会は外務省の圧力を受けて1933年5月に日本国際協会への改名に追い込まれる⁽⁷⁹⁾。こうした本国の状況を遠く欧州から見ていた安達は1934年に客死する。

そして日本政府は第一次世界大戦とは真逆の対独政策を選択する。ドイツでの反戦運動をユダヤ人による陰謀、「背後からの一突き」としたユダヤ人迫害を一助として政権を握ったヒトラーのドイツとの協調、同盟に向かったのである。安達が講演で賞揚した“国際法を盾にして皇帝に抗議したドイツ人”を、かつての聴衆はどう思い返したのだろうか。

《以上です》

(78) 朝日新聞 2007年9月13日夕刊記事「(新聞と戦争) 社論の転換：30 別の道」。

(79) 改名後も日本国際協会は世界連合からは脱退はしなかったものの、1937年の日中全面戦争化後に世界連合から弾劾決議を受け、ついに1938年2月に脱退に至った。同協会は敗戦後に国際連合研究会ついで日本国際連合協会となり、現在に至っている（現在は公益財団法人）。参照：前掲、池井優「日本国際連盟協会」044頁、045-046頁および同協会ウェブサイト <http://www.unaj.or.jp/>。